

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 獣医学科

職階 助教

氏名 風間 啓

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

産業動物内科学研究室に所属し、主に牛の臨床学について教育、研究活動を行っている。また、附属動物病院の産業動物診療部に所属し、二次診療を通して、参加型臨床実習の充実、実践力を養う教育に力を入れている。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
産業動物獣医総合臨床	獣医学科	必修	5	約150名
獣医総合臨床実習	獣医学科	必修	5	約150名
獣医畜産管理学	獣医学科	選択	3	約150名
産業動物臨床基礎実習	獣医学科	選択	1	約140名
牧場実習	獣医学科	必修	2	約150名
専門学外実習	獣医学科	必修	5	約150名
総合獣医学	獣医学科	必修	6	約150名
産業動物臨床実習	獣医学科	必修	5	約150名
家畜伝染病学実習	獣医学科	必修	5	約150名
基礎・小動物総合臨床Ⅲ	獣医学科	必修	4	約150名
産業動物アドバンス実習	獣医学科	選択	6	約6名
卒業論文	獣医、動物応用科学科	必修	6, 4	約8名
獣医学特論Ⅰ	獣医学科	必修	5	約3名
獣医学特論Ⅱ	獣医学科	必修	6	約8名
科学の伝達	動物応用科学科	選択	4	約4名
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3	約4名
比較動物学Ⅰ	獣医保健看護学科	必修	1	約70名

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

学生には自分で考えて行動できる人材になってほしいと考えている。臨床現場では、動物のため、飼い主さんのため、あるいは社会のために、どのような選択をすることが一番適切かを常に考えなければならない。そのためには、動物をよく診て、飼い主さんとコミュニケーションを取り、いくつもの選択肢の中から自分なりの答えを出す必要がある。そうしたひとつひとつの選択が、動物と人を幸せにすることにつながるということを教えていきたい。獣医学、農学的な知識や技術を有するだけでなく、産業動物の臨床を通して、自ら考える力を養い、行動できる学生を育てたいと考えている。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

産業動物を通して、動物と人を幸せにできる人材を育てるために、学生が自ら考えることができる場を作るように心がけている。

臨床実習では、実際に怪我や病気になってしまった動物の診療に携わり、応用力を養っている。その際、どのような症状なのか、事前に行った検査結果や治療内容などの情報は一切与えず、まずは自分の目で見て、聞いて、触って、五感を使って各自で診療を行ってもらう。その後、オープンクエスチョンにより、自分がその症例に対して感じたこと・考えたことについて、根拠をもって言葉にしてもらう。その上で、診断に必要な検査を提案してもらい、一部の検査を学生自身に実施してもらっている。質問などがあれば、まず自分はどう考えるか、本人の意見を聞いた上で回答し、必ず考えるという過程を経るようにしている。また、飼い主さんとのコミュニケーション能力を養うために、少人数での班分けを行い、学生間での意見交換の場を作り、互いに高め合う教育の場を提供している。実技に関しては、病理解剖に供された動物の四肢や臓器を用いて、注射法や縫合法を練習することで、生体に苦痛を与えず、かつ生体に近い条件下で実習できるように努めている。さらに、より知識を深めるために、症例に関するレポート課題を課すことで、自習の機会を設けている。

低学年においては、参加型臨床実習につながるように、必要な基礎知識を身に付けられるように心がけている。より臨場感のある授業ができるように、なるべく臨床現場でのトピックや、時事的なことを取り入れるようにしている。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

臨床実習において、各自が主体となった診療を行い、疑わしい疾患、鑑別診断リストを挙げてもらおう。次に、自分たちで疑った疾患を診断するためにはどんな検査が必要かを提案してもらい、必要に応じて実際に検査を行う。検査結果に基づいて診断を行い、適切な治療法を考え、薬剤の選択等を行い、実際に治療にあたる。その後は、治療方法が適切だったかどうかのモニタリング方法も自分たちで考え、提案、実行するようにしている。携わる症例は少人数班で担当し、適宜班内でディベートを行っている。また、質問があった場合には、まず自分がどう考えるかを聞いた上で答えるようにしている。

(2) ICTの教育活用

有

オンデマンド教材を作成し、実習を行う前に視聴して準備を行う。また、一部の臨床実習症例については、症例の概要について動画教材を作成して公開している。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

B

症例について学生が考える力を向上させるため、オープンクエスチョンにより主体的に考察できるようにしている。

(2) 学生の理解度の把握

B

授業評価アンケート、課題レポート、実習中の質疑応答を通して理解度を把握した上で、実習内容や次年度の授業、実習の見直しを行っている。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

A

授業、実習中に次回の内容に触れ、予習すべきポイントを示している。実習では、学生の理解度、習熟度に合わせてスケジュールを決め、必要な手技等について事前にある程度周知し、予習すべきポイントを明確にしている。

(4) 学生とのコミュニケーション

A

授業の合間等に直接質疑応答を行っている。また、症例に関することは、症例検討会を通して質疑応答に対応し、スライド作成時には症例データをみながら個別に解説を行っている。

(5) 双方向授業への工夫

A

実習については、少人数の班で行い、適宜各班をまわり実習内容についてディベートを行っている。講義科目については、講義中に学生に問いかけを行っている。

(6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

A

獣医学教育モデル・コア・カリキュラムに即した内容で授業を行うようにしている。また、国家試験対策では、産業動物臨床学について、循環器病、消化器病といった分野ごとに重要な点を抽出し、できる限り簡潔に授業を行うようにした。限られた時間で効率よく試験勉強ができるように、過去の出題傾向や近年産業動物で問題となっている事象なども授業に取り入れるようにした。また、重要点をまとめた資料を作成し、自学の参考にしてもらえるように心がけた。国家試験直前の授業では、できる限り過去問題に則した問題をスライドに取り入れ、まずは自分で考えてもらい、次のスライドでその問題のポイントを解説することで、効率よく問題を解く訓練をした。さらに、低学年の授業においても、近年国家試験で出題された分野について、トピック的に取り入れるようにした。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

臨床実習においては、検査や治療などの項目に時間を割きがちであったが、飼養管理方法等についてじっくりと実習できる時間を増やした。

(2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

健康な動物だけでなく、病気の動物に対する基本的な接し方について、より深く習熟できたが、個別の症例に応じて特殊な飼育、看護方法を学び、一般的な管理方法について十分に学習できない班があった。

(3) (2)を踏まえた次年度の取組

一律に一般的な病気の動物の飼育方法を学べるよう、担当症例以外の症例についても実習に取り込んで、学びの平準化を図る。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

(1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

学習のひとつの目標は国家試験の合格にあると考えるため、これまで国家試験に関わる部分を中心に科目内容を広く講義していた。しかし、国家試験につながっているという具体性が伝わりにくかったと思われる。そのため、担当している科目について、国家試験で実際に取り上げられているところ、具体的には過去問などを示し、それが今学習していることとどうつながっているかを解説していく。国家試験に関することを明示することで学生たちの学習意欲を高めていきたい。

(2) (1) の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

学生には直接授業内容の変化について話をし、意見を聞くようにしている。国家試験に関わる点は具体的な目標となるため、学生の意欲の向上につながっている。また、授業評価アンケートや国家試験対策では担当科目ごとに学生の習熟度を算出しているため、それらを参考にししてさらに改善を試みている。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

学内でのFD研修会には必ず参加するようにしている。また、オンデマンド授業の講習や授業の進め方に関連するものなど、セミナーを積極的に視聴するよう心掛けている。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

学生自身が自分の習熟度を客観的に確認できるシステムを作りたい。例えば、自分が実習しているところを撮影し、班ごとに視聴して、良い点、改善点などを指摘し合い、客観的に見る目を養い、積極的にコミュニケーションを取れる場を提供したい。ただし、撮影を嫌う学生もいると思うので、個人の負担にならないようなシステム作りに努める。長期的には、撮影等をせずとも各個人が実習時間中に積極的にディベートできる環境を整えたい。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2026年4月

シラバス, AzaMoodle, FD研修会